東京未来大学研究紀要　2010年　第3号　pp.29-36

「ふつう」の望ましさについての発達的変化
―小学生・中学生・大学生の比較―

大橋　恵

Developmental Changes in the Image of an Ordinary Person: A Comparison among Elementary, Junior High, and University Students

Megumi M.Ohashi

Abstract

The present study examined the cultural value attached to ordinariness in Japan. In previous researches, the Japanese attitude toward ordinariness was examined only among young adults. The present study aimed to ascertain the developmental changes in this attitude toward ordinariness. Elementary, junior high, and university students in the Tokyo area were asked about the connotations of the word “ordinary” in the phrase “an ordinary person.” In addition, they were asked to rate their image of an ordinary person using adjective pairs. It was found that while ordinariness did not receive a very favorable evaluation in general, the evaluation of junior-high students was greater than that of university students.

キーワード

日本人，文化心理学，価値観，ギャング・エイジ，ふつう

問題

心は根本的に社会的な産物であり，心理学の理論や方法を考えるためには文化的背景を考慮することが大切であることが近年再認識されつつある。文化的な背景といっても様々な面が考えられるが，日本人が欧米人と最も異なるのは，自分のどの面を改善したいと思うかではないかと考える。つまり，欧米人が自分の得意な面を伸ばすように努力するのに対し，日本人は自分が不得意な面の改善を目指す。欧米のやりかたは人を個性化に導くのに対し，日本人のやりかたは人の平均化・「ふつう」化を導くであろう。

「ふつう」という概念は，われわれの生活の中で日常的に使われている。社会言語学によれば，ある言語においてある言葉が存在し，日常的に頻繁に使用されるということは，その文化において，それが他とは区別すべき重要な概念であることを意味するという（鈴木，1973）。さらに，日常的に用いる言葉には，人が物事を考えたり，行動したりする際に重要な役割を果たす通俗的な考え方（folk psychology）が反映されていると考えられるので（Bruner，1990），「ふつう」は，日本人の物事の判断にとって重要な概念であると考えられる。

国語大辞典「言泉」（林，1986）によれば，「ふつう」という語の意味は，下のようになる。

1. 世間に多く見られたり，いつもそのような状態であるさま。
2. 一般的な度合い。平均。

定義から明らかなように，「ふつう」は良い意味でも悪い意味でも使われる。日本で一般的に使用されている類語辞典6冊と反対語辞典3冊を調べてみると，「ふつう」の類語には「一般」「通常」「並み・人並み」「尋常」という中立語が頻繁に挙げられる。さらに，「常」という中立的な語や「ありふれた」「平凡」というやや否定的な語が登場する。類語辞典・反対語辞典に頻繁に登場する「ふつう」の反対語は，良い意味の強い「特別」とやや悪い意味の強い「特殊」である（田・泉原・金，1998；磯貝・室山，1989；北原・東郷，1989；中村，1998；大野・浜西，1985；類語研究会，1991；桜井，1991；小学館辞

典編集部，1994；徳川・宮島，1975）。

このように，「ふつう」には良い意味と悪い意味がありうるが，人を表す際には良い意味に使われることが多いのではないかと考える。なぜなら，「ふつう」であることは，これまでの研究で主張されている日本文化の伝統的な価値観と矛盾しないからである（e.g., Feather & McKee,1993；Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999；Markus & Kitayama, 1991）。さらに，日本人にとっては「ふつう」の持つ意味のうち,「良くはない」よりも「悪くはない」の意味のほうが強く感じられるのではないだろうか。なぜなら，北アメリカ人が良いことがあるかどうかに焦点を当てて考える傾向があるのに対し，東アジア人は制御焦点が優位であり，悪いことがあるかどうかに焦点を当てる傾向があるからである（Elliot, Chirkov, Kim, & Shelden, 2001；Lee, Aaker, & Gardner, 2000）。実際に，良い点があることよりも悪い点がないことのほうが日本人の精神的健康に影響が大きいこと（北山・唐沢，1995）や，他者からの期待や基準を満たせないことに対して日本人は特に敏感であること（Unemori, Omoregie, & Markus, 2004）がこれまで示されている。

人を形容する際の「ふつう」が好ましくとらえられていることが伺えるいくつかのデータがある。まず,「ふつうの人」と言われて思い浮かべる人物は,「悪い意味でふつうの人」よりも「良い意味でふつうの人」に近いことが示されている（大橋・山口，2005）。また，偽の成績フィードバックという手法を用いた研究でも，成績がふつう（中程度）と言われると，良いと言われた時と同じくらい結果に満足し，悪いと言われた時よりも否定感情が少ないという知見が得られている（大橋，2008；佐野・黒石，2007；高田，2006）。このように，人を表す際の「ふつう」には肯定的な意味が強いと考えられる。

それでは，いつ頃からこのような価値観が現れるのだろうか。今までの研究は青年期以降を対象にしてきた。しかし「ふつう」について考えるならば，発達的な変化は見逃せない。発達心理学においては，発達に伴い大人からの影響よりも同世代の仲間たちからの影響が強くなる時期があることが知られる。特に，小学校中学年から高学年に特徴的な同性の仲間集団でのつきあいが，自我同一性の形成や社会性の獲得に重要であるとされている（e.g., 井上・久保，1997）。

そこで，本研究では，集団圧力の影響を受けやすいといわれている小中学生の「ふつう」に対する意識を調べ, 大学生のそれと比較した。具体的には,「ふつうの子」について持っているイメージおよび人を表す「ふつう」が望ましい意味だと思う程度を測定した。

方 法

調査対象

東京都内の公立小学校の5年生88名（男子50名女子38名），6年生94名（男子50名女子44名），公立中学校の1年生112名（男子52名女子60名），2年生109名（男子63名女子46名），大学3年生77名（男性34名女性43名）の，計480名が質問紙に回答した。小中学校は学級の時間に，大学では心理学の概論の講義前にボランティア回答者を募った。

質問紙

ふつうの子のイメージ　井上・小林（1985）を参考にした形容詞10対（具体的な項目は表4参照），および好意度を測定する1項目を使用した。好意度に関しては,「あなたはふつうの子がどのくらい好きですか」と尋ね,「とても好き」から「ぜんぜん好きではない」までの選択肢から選ばせた。すべて5点尺度だった。中学生と大学生に対しては，先に自由記述で身の回りにいる同世代同性のふつうの子

の特徴を自由に8つまで挙げてもらった後でこれらの質問を行った。なお，本稿では数値データの結果のみ報告する。

自分をふつうだと認知する程度　「あなたは自分をふつうだと思いますか」と質問し，そう思う（5）からそう思わない（1）までの5点尺度で回答を得た。

ふつうの望ましさ　大学生を対象にした先行研究（大橋，2006研究6）では「人を表す際のふつうは良い意味だと思いますか，悪い意味だと思いますか」と尋ね，9点尺度で回答を得ていた。本研究でも同じ質問を用いたいと考えたが，小学生には難しすぎることを考慮し，尋ね方を変更した。具体的には，「ふつうはほめ言葉か」と尋ね，そう思う（5）からそう思わない（1）までの5点尺度で回答を得た。

その際，「自分にとって」「級友たちにとって」「世間一般で」の3種類に分けて望ましさを測定した。その理由は，当人たちの価値観の平均値と他の人たちの価値観の推測の平均値が往々にして異なる（e.g.,平井，1999）。自分について答える場合にはそう答えることで他者からどのように評価されるかを回答者が考えやすいため，回答内容が真意とは異なることがあるが，他の人たちの価値観についての推測させた場合にはそのような回答のゆがみが起こりにくく，より正確に一般的な考え方が測定できるという指摘があるからである。「ふつうさ」に関しても指摘のようなずれは見られ，「ふつう」について自分はあまり望ましいとは思わないが世間では望ましいと思われていると考えるという乖離が指摘されている（Ohashi,2007）。

結果

自分を「ふつう」だとみなす程度

学年（5）×性別（2）の2要因分散分析を行った。その結果，自分をふつうだと認知する程度について，学年の有意な主効果が見られた（F（4,470）=10.44, p<.0001）。下位検定（Tukey, p<.05）によれば，小中学生のほうが大学生よりも自分を有意にふつうであるとみなしていた。また，性別の主効果も有意であり，女性のほうが男性よりも自分を有意によりふつうだとみなしていた（F（1,470）= 4.82, p<.05；表1）。

表1　自分をふつうだと認知する程度の学年別平均値および t 値

学年		男子	女子	合計		t 値
小学5年生	平均値	3.64	3.76	3.69	a	3.62
	(標準偏差)	(1.24)	(1.10)	(1.18)		***
小学6年生	平均値	3.32	3.48	3.39	a	2.26
	(標準偏差)	(1.25)	(1.00)	(1.14)		*
中学1年生	平均値	3.29	3.47	3.38	a	5.52
	(標準偏差)	(1.21)	(1.13)	(1.16)		***
中学2年生	平均値	3.29	3.35	3.31	a	3.35
	(標準偏差)	(1.22)	(1.39)	(1.29)		***
大学生	平均値	2.18	2.88	2.57	b	-3.03
	(標準偏差)	(1.14)	(1.25)	(1.25)		**

*** p < .001, ** p < .01, * p <.05

(注)異なる添え字は，Tukey 検定で有意差が見られたことを示す(5%水準)。

また，中点（3,「どちらともえいない」とラベル）との有意差について検定したところ（表1右側の t 値参照），小中学生は自分のことを有意にふつうであると答えており，大学生は有意にふつうだと思わないと答えていた。

「ふつう」の望ましさ

次に，ふつうの望ましさに関してだが，全体的にやや否定的な回答が得られた。先行研究では自分にとっての望ましさと世間一般での望ましさ評価に乖離が見られたため，本研究でも3項目に分けてふつうであることの望ましさを測定した。

3項目の信頼性係数は高かった（α = .89）が，質問の種類（被験者内要因）・学年・性別（被験者間要因）を独立変数とする3要因の分散分析の結果，質問項目の種類と学年の交互作用効果および質問項目の種類と性別の交互作用効果が共に有意であった（F(1,470) =1.99, p<.05 ; F(1,470) = 4.19, p<.05）。そこで，各質問について，学年（5）×性別（2）の2要因分散分析を行った。

表2　ふつうの望ましさの学年別平均値（標準偏差）

		学　年				
		小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	大学生
個人の考え	男子	2.70	2.78	3.19	2.95	2.38
		(1.15)	(1.02)	(1.17)	(1.11)	(1.02)
	女子	2.53	2.52	2.87	2.72	2.48
		(1.06)	(1.23)	(0.89)	(1.09)	(1.15)
	合計	2.63 ab	2.66 ab	3.02 a	2.85 ab	2.43 b
		(1.11)	(1.12)	(1.04)	(1.10)	(1.09)
同級生の考え	男子	2.40	2.80	3.12	2.81	2.41
		(1.05)	(1.01)	(1.15)	(1.08)	(0.99)
	女子	2.34	2.59	3.00	2.72	2.29
		(1.10)	(1.15)	(0.88)	(1.03)	(0.94)
	合計	2.38 b	2.70 ab	3.05 a	2.77 a	2.34 b
		(1.06)	(1.08)	(1.01)	(1.05)	(0.96)
世間一般の考え	男子	2.22	2.54	2.83	2.69	2.50
		(1.09)	(0.97)	(1.28)	(1.11)	(1.02)
	女子	2.24	2.61	3.00	2.76	2.48
		(1.14)	(1.15)	(0.86)	(1.16)	(0.97)
	合計	2.23 b	2.57 ab	2.92 a	2.72 a	2.49 ab
		(1.11)	(1.05)	(1.08)	(1.13)	(0.99)

（注）異なる添え字は，学年間を比較した Tukey 検定で有意差が見られたことを示す（5%水準）。

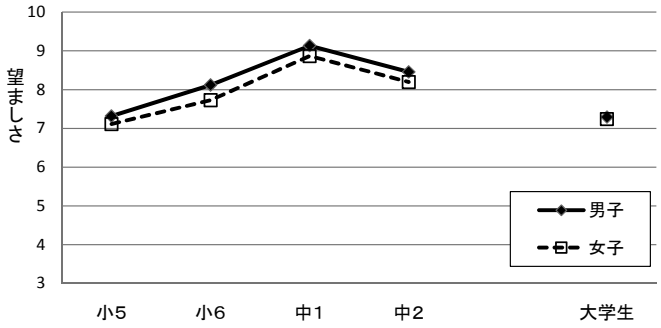

図1 「ふつう」の望ましさ（3項目合計）の学年別平均値

まず，自分にとって「ふつう」がほめ言葉かについては，学年の有意な主効果が見られた（F（4,470）= 4.02, p<.01）。下位検定（Tukey, p<.05）によれば，大学生よりも中学1年による評価が有意に高かった。同級生にとって「ふつう」はほめ言葉かについても学年の有意な主効果が見られ（F（4,470）= 7.42, p<.0001），中学生の回答は，小学5年生および大学生よりも有意に肯定的だった。また，世間一般では「ふつう」はほめ言葉かについても学年の有意な主効果が見られ（F（4,470）= 5.39, p<.0001），小学5年生よりも中学生で有意に肯定的な回答が得られた。この三つの質問について，性別の主効果および交互作用効果は有意ではなかった。

各質問に対する平均値は表2にまとめたが，おおむね中学生をピークとする山形になっている（図1）。以上より，「ふつう」が望ましいという感覚は，小学校から中学校の間に育っていくことが示唆される。

相関関係

次に，ふつうを望ましくとらえることと自分をふつうだと考えることとの相関関係を小学生・中学生・大学生という年齢層別に算出した（表3）。その際，3種類の尋ね方をしたふつうの望ましさ同士の内部相関は高かった（r＞.600）ものの，質問間で異なるパターンが見受けられたため，自分の考え，同級生たちの考えについての推測，世間一般の考えの推測と分けて相関係数を報告する。

その結果，全体的に，自分を「ふつう」だと考える人ほど，ふつうを望ましくとらえていた。これは自分に都合よく物事を解釈する人の認知傾向に当てはまる。

また，自分は「ふつう」だと考える人ほど自分にとってふつうが望ましい意味であると回答する傾向がどの年齢層にも共通して見られた。しかし，中学生以上では，自分を「ふつう」であると認知する程度と世間一般でのふつうの望ましさの認知には正の相関が見られず，大学生に至っては同級生の考えるふつうの望ましさの認知とも有意な相関が認められ

表3　年齢階層別相関係数

		ふつうの望ましさ		
		個人の考え	同級生の考え	世間一般の考え
自分をふつうだと認知する程度	小学生	.192 **	.160 *	.190 *
	中学生	.325 **	.294 **	.109
	大学生	.347 **	.170	.217
ふつうの望ましさ（個人の考え）	小学生	1	.651 **	.653 **
	中学生	1	.746 **	.593 **
	大学生	1	.495 **	.496 **
ふつうの望ましさ（同級生の考え）	小学生		1	.765 **
	中学生		1	.631 **
	大学生		1	.624 **

** p < .01, * p <.05

なかった。

3種類の望ましさの内部相関は概して正の高い相関が見られているが，大学生は自分の考える望ましさと同級生や世間一般の考える望ましさとの関連性がやや低かった。この意味するところは，大学生にもなると，自分の考えと他の人たちの価値観が違っているという認知が発達するという解釈も可能だが，むしろ，自分と他者の価値観が異なることを容認できるようになるということではないか。

「ふつうの子」に対するイメージ

最後に，同世代同性の「ふつうの子」に対してどのようなイメージが持たれているのかに関して調べた10の形容詞対と好意度の結果を報告する。まず

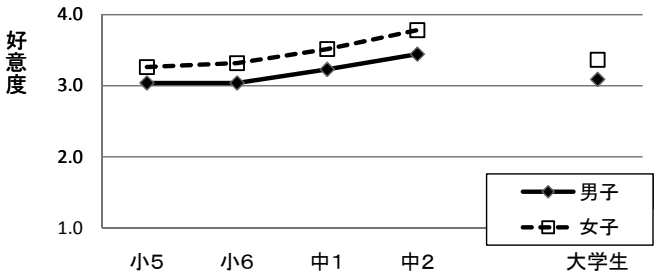

図2 「ふつうの子」に対する好意度の学年別平均値

表4 「ふつうの子」のイメージの学年別平均値(標準偏差)

	学年				
	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	大学生
親切な—親切でない	3.28 bc (0.77)	3.20 c (0.52)	3.48 ab (0.75)	3.60 a (0.86)	3.25 bc (0.55)
おもしろい—つまらない	3.11 abc (0.72)	2.97 c (0.77)	3.39 a (0.77)	3.32 ab (0.89)	3.04 bc (0.57)
思いやりがある—思いやりがない	3.39 ab (0.76)	3.31 b (0.64)	3.64 a (0.80)	3.62 a (0.83)	3.30 b (0.59)
物知り—物知りではない	3.02 b (0.66)	2.98 b (0.69)	3.30 a (0.63)	3.14 ab (0.78)	2.93 b (0.56)
あたたかい—つめたい	3.31 abc (0.72)	3.14 c (0.68)	3.58 a (0.79)	3.54 ab (0.83)	3.27 bc (0.63)
明るい—暗い	3.60 ab (0.90)	3.33 b (0.83)	3.75 a (0.80)	3.66 a (0.95)	3.25 b (0.60)
きちんとしている—だらしない	3.58 a (0.75)	3.41 ab (0.74)	3.62 a (0.76)	3.61 a (0.79)	3.18 b (0.75)
自信がある—自信がない	3.11 a (0.73)	3.04 ab (0.70)	3.21 a (0.74)	3.15 a (0.83)	2.76 b (0.72)
たのもしい—たよりない	3.26 ab (0.93)	3.04 b (0.80)	3.45 a (0.84)	3.50 a (0.83)	2.95 b (0.74)
目立ちたがり—おとなしい	2.84 ab (0.77)	2.66 ab (0.87)	2.85 a (0.71)	2.78 ab (0.91)	2.47 b (0.74)

（注）異なる添え字は，Tukey 検定で学年間に有意差が見られたことを示す（5%水準）。

探索的な因子分析を行ったが，年齢層間で因子の分かれ方が一致しないため，今回は項目ごとにパターンを提示することにする。

まず，「ふつうの子」に対する好意度は，女子のほうが高く，中学2年生までは年齢とともに上がっていき大学生で低下する傾向が見られた（図2）。学年（5）×性別（2）の2要因の分散分析の結果，学年の主効果が有意であった（F（4,470）= 3.69, p<.01）。多重比較の結果，中学2年生は小学生よりもふつうの子を有意に好ましく評価していることが示された。これに加え，女性のほうが男性よりも全体的に評価が高いという，性別の主効果も有意であった（F（1,470）= 9.77, p<.01）。交互作用効果は有意ではなかった（F（1,470）<1, *n.s.*）。

形容詞対10対の学年別平均値を表4にまとめた。2要因の分散分析の結果，全項目で学年の主効果が有意であった。「ふつうの子」は，明るく，親切で，あたたかく，思いやりがあり，きちんとしていると全体的に評価されていた。親切で物知りというイメージは中学生でもっとも強かった。おもしろくて，明るく，あたたかく，思いやりがあり，頼もしいというイメージは，小学6年生・大学生よりも中学生で強かった。きちんとしていて自信があるというイメージは，大学生よりも小学5年生・中学生で高かった。おとなしいというイメージは，大学生で最も強く，中学1年生で最も弱かった。全般的に，中学生がふつうの子に対して最も高く評価している傾向が見て取れる。

考察

ふつうの望ましさに見られた学年差およびふつうの子のイメージに見られた学年差から，「ふつう」が望ましいという感覚は，小学校から中学校の間に育っていくことが示唆される。そして自我同一性が確立されてくる大学生では「ふつう」をそこまで望

ましいと考えなくなるという変化も見られた。

また，女性は自分をふつうだとみなす傾向が男性よりも強かった。さらに，女性のほうが男性よりも「ふつう」の子に対して好意的であった。これらの結果は，女性のほうが対人関係に配慮するように育てられるという先行研究との知見と一致していると考えられる（Gilligan,1982）。つまり，他の人たちとの関係で「ふつう」にふるまうことが女性において高く評価されるということを示すのではないか。ただ，本研究においては同性の「ふつう」の子について考えるように指示したため，本研究で見られた性差が，男性よりも女性がより「ふつう」の子を好むのか，「ふつう」の女性のほうが「ふつう」の男性よりも好かれるのかは，明瞭ではない。今後の検討が待たれる点である。

一方，同級生や世間一般は望ましいと考えるが自分としてはそうは思わないという乖離が，今回の研究では見られなかった。これに対して，先行研究（Ohashi,2007）では9件法を使っているのに対し，今回はより差が検出しにくい5件法で測定したから差異が検出されにくくなったという解釈が挙げられるが，今回の大学生の平均値を見る限りこの解釈は当てはまらない。また，先行研究では「ふつうの人」といったときの「ふつう」は良い意味かそれとも悪い意味かと尋ねたのに対し，今回は小学生に対するわかりやすさを考慮し「ふつうはほめ言葉か」という質問文を用いたことも理由の一つである。「ふつう」はほめ言葉ではないが，良い意味ではあるということもありえる。価値観を測定する際には用語の選択が大事であることもまた，この研究から示唆される。

本研究では，集団の影響を受けやすい小学校高学年の児童や中学生が自分を「ふつう」だとみなしており，中学生は特に「ふつうの子」に肯定的なイメージを持っていることが示された。今後は，具体的にどのような特徴を持っていることが「ふつうである」「ふつうではない」という判断に結びつくのか，中身の検討が必要ではないだろうか。

謝辞

本研究は，平成20～21年度科学研究費補助金若手研究（B）課題番号20730433の助成を受けて行われた。調査にご協力いただいた足立区S小学校，D中学校，S中学校，文京区T大学，小金井市T大学の皆様に感謝いたします。

引用文献

Bruner, J.（1990）. *Acts of Meaning*. Cambridge: Harvard University Press.

田　忠魁・泉原省二・金　相順（編著）（1998）. 類義語使い分け辞典　研究社

Elliot, A. J., Chirkov, V. I., Kim, Y., & Shelden, K. M.（2001）. A cross-cultural analysis of avoidance (relative to approach) personal goals. *Psycho -logical Science*, 12, 505-510.

Feather, N. T., & McKee, I. R.（1993）. Global self-esteem and attitudes toward the high achiever for Australian and Japanese students. *Social Psychology Quarterly*, 56, 65-76.

Gilligan, C.（1982）*In a Different voice: Psychological theory and women's development*, Harvard University Press
（ギリガンD.　岩男　寿美子（訳）（1986）.もうひとつの声－男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティー　川島書店）

林　大（監修）（1986）. 国語大辞典　言泉　小学館

Heine, S. J., Lehman, D., Markus, H. R., & Kitayama, S.（1999）. Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*,

106, 766-794.

平井美佳（1999）.「日本人らしさ」についてのステレオタイプ－「一般の日本人」と「自分自身」との差異－　実験社会心理学研究, 39, 103-113.
（Hirai, M. Stereotypes about the Japanese: Differences in Evaluations between “The Japanese” and “Myself.” *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 39, 103-113.）

井上健治・久保ゆかり（1997）. 子どもの社会的発達 東京大学出版会
（Inoue, K., & Kubo, Y. *The social development of children: Causes and consequences*. Tokyo: University of Tokyo Press）

井上正明・小林利宣（1985）. 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観　教育心理学研究, 33, 54-57.
（Inoue, M. ,& Kobayashi, T. The research domain and scale construction of adjective-pairs in a semantic differential method in Japan. *The Japanese Journal of Educational Psychology*, 33, 54-57.）

磯貝英夫・室山敏明（編）（1989）. 類語活用辞典　東京堂出版

北原保雄・東郷吉男（1989）. 反対語対照語辞典　東京堂出版

北山　忍・唐沢真弓（1995）. 自己－文化心理学的視座－実験社会心理学研究, 35, 133-163.
（Kitayama, S., & Karasawa, M. Self: A cultural psychological perspective. *Journal of Experimental Social Psychology*, 35, 133-163.）

Lee, A. Y., Aaker, J. L., & Gardner, W. L.（2000）. The pleasure and pains of distinct self-construals: The role of interdependence in regulatory focus. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 1122-1134.

Markus, H., & Kitayama, S.（1991）. Culture and self; implication for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

Matsumoto, D.（2002）. *The new Japan: Debunking seven cultural stereotypes*. Maine: Intercultural Press.

中村一男（編）（1998）. 反対語大辞典 第47版　東京堂出版

大橋　恵（2006）. 個人の将来予測における『ふつう』バイアス－固有文化心理学による検討－　東京大学大学院人文社会系研究科博士論文（未公刊）
（Ohashi, M. M. *Super-ordinary bias in self-predictions: An approach from indigenous psychology*. Unpublished doctoral dissertation, University of Tokyo, Tokyo.）

Ohashi, M. M.（2007）. Is being ordinary good? : Discrepancy between how I think and how I think others think. Poster presented at the 7th conference of *Asian Association of Social Psychology*. Kota Kinabalu, Sabah, Malaysia.

大橋　恵（2008）. ふつうなら, 満足－フィードバックされた成績が心理テストの妥当性評価に与える影響－　東京未来大学こども心理学部紀要, 1号, 17-25.
（Ohashi, M. M. Satisfied if I am evaluated as average: The effect of feed-backed performance on validity evaluation of a test）

大橋　恵・山口　勧（2005）.「ふつうさ」の固有文化心理学－人を形容する語としての「ふつう」の望ましさについて－　実験社会心理学研究, 44, 71-81.
（Ohashi, M. M., & Yamaguchi, S. On desirability of “ordinary” as a person descriptor adjective: An approach from indigenous psychology. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 44,

71-81.）

大野　晋・浜西正人（1985）．類語国語辞典　角川書店

Peak, L.（1991）．*Learning to go to school in Japan: The transition from home to preschool life*．Berkeley, CA: University of California.

類語研究会（1991）．似た言葉使い分け辞典　創拓社

桜井正信（1991）．反対語辞典　日本文芸社

佐野予理子・黒石憲洋（2007）．「ふつう」を基準としたフィードバックが感情状態に及ぼす影響　日本心理学会第71回大会発表論文集，207.
（Sano, Y., & Kuroishi, N.）

小学館辞典編集部（1994）．類語例解辞典　小学館

鈴木孝夫（1973）．ことばと文化　岩波新書
（Suzuki, T.）

高田利武（2006）．日本文化における自己卑下と自己高揚－実験的検討－宮城学院女子大学研究論文集，103，113-129.
（Takata, T.）

徳川宗賢・宮島達夫（編）（1975）．類義語辞典　第9版　東京堂出版

Unemori, P., Omoregie, H., & Markus, H. R.（2004）．Self-portraits: Possible selves in European -American, Chilean, Japanese and Japanese -American cultural contexts. *Self and Identity*, 3, 321-338.